



プリミルシャイ

淫紋と触手コスチュームに墮とられる100日

【小説】火村龍
【挿絵】暮れたいし

試し読み版

18
未満

「淫紋はね、時間が経ったり、心が弱くなったりすると広がっちゃうの。あとはそうね…
…身体がイヤらしくなっちゃうとかかな」

「う、く…：…な、なら平気ね…：…！ わたしは、弱気になったりなんかしないから」シャ
インは声を絞り出した。

「そうかしら？ あ、そうそう。ばれないっていうのは保証するわ。淫紋は覚醒するまで
誰にも見えない。シャインとミーナだけの秘密よ」ライノミーナはうつとりとした表情を
浮かべていた。「それで、淫紋を解く方法知りたいわよね？ 当然よね、それが一番知り
たいことだもの。もう試したと思うけど、プリミルエナジーじゃ淫紋は消えないの。消す
方法はひとつだけ、ミーナを倒すことよ。ミーナにはたくさんの駒がいるから大変かもし
れないけどね」

「そ、それだけでいいのね…：…！ なら、いますぐ解いてあげるわ…：…プリミル!!」シャ
インはプリミルエナジーを引き出した。

「あつ！ 待つて待つて!!」ライノミーナが叫んだ。

シャインのスーツが発光する。強大なエナジーが迸りスーツに満ちていく。手足に快感
が走るが構わない。すぐにこの拘束を解き、ライノミーナを倒すのだ。見た目こそ可憐な
少女ではあるが、彼女は魔姫だ。敵の将——躊躇いは抑え込む。

だが、光り輝くコスチュームは唐突にその輝きを失い始めた。

「あ、うあ、な、ななが…：…!! あああああつ！ ち、力が、抜けるううう…：…ッ
「だからいったのに」

エナジーがどこかに消えていき、なぜか快感が倍增する。引き攣った声をあげて悶絶するシャインの大切などころになにかが溜まり、解放を求め秘所の口をノックし始めた。

「淫紋はね、あなたのプリミルエナジーを吸い取るのよ。そして、それを快感に変えるの。だから力の使いすぎには気をつけてね。シャインは力が強いから、たくさん技を使ったらもう気持ちよすぎて狂っちゃうから。ほら、どれくらい気持ちいいか教えてあげる」

ライノミーナの右手がシャインの股間の肉をつかんだ。

「ほうううつつ！ さ、触らないで!!」シャインは叫んだ。いままで、これほどまで強い刺激を感じたこともなければ、大事などころの肉がこれほどまでに柔らかく、ぷにぷにとイヤらしいものであることも知らなかった。たつぷりと恥丘を揉みほぐされた後、紫の爪に膨らみの中心に刻まれた筋を擦りあげられると、得も言われぬ快感がこみ上げてくる。

（こ、これが、あそこの快感……!? し、知らない……こんなの知らないわ!! あああつ、こんなに激しいものだったなんて……!）

性を嫌悪するあまり遠ざけてきた欲情——シャインはそれを堪える術を知らなかった。

滅茶苦茶に暴れてみても、拘束を引きちぎれるだけの力が湧いてこない。エナジーをいくら込めても、いつもの半分も力はず、逆に快感が増してしまう。

「もう。力を使わない方がいいっていつてるのに。それにしても……シャインのおまんこ、ぜんぜんなれてないんだ。もしかしてオナニーもしたことないの?」

「だ、だまりなさいっ! そんな……そんなイヤらしいこと……あ、ああんっ! やめて、そ、そこは……!!」シャインは真っ赤になって唇を噛んだ。

ライノミーナの指が、割れ目の上部に移動して、そこをしつこくつついた。解放を求めて子宮の内側から秘所の入り口を叩く衝動はもはや、軽いノックから激しく扉を打ち鳴らすものへと変わっている。

シャインは両手を固く握りしめ、太ももをたぶたぶと震わせて衝動に抗った。快感など認められない。帝国と闘うプリミルであるということだけでなく、瑞華沙弥がそれを許さない。明滅する視界に意識が反転し、あの輪姦される少女の姿が浮かび上がる。彼女は悦んでいる。膣を突かれ、乳首を揺らし、絶頂の瞬間の、あのなにもかもを放出した恍惚とした表情——いまの自分も彼女と同じ顔をしているのだろうか。まさか、そんなことはあり得ない。あり得るはずがない。彼女のように性交しているのですらない。秘部を擦られ、つつかれるだけで弾けてしまいそうなんて。

（イヤよ、絶対にイヤ！ わたしは、こんなのに負けたり——！）

「イツチャウ？ ねえ、もうイキそうなんですよ？」ライノミーナが笑った。

「ほら、イツチャいなさいよ。我慢できないんですよ？ 知らないなら教えてあげる。ここ、クリトリスっていうのよ。これで——」ライノミーナは、シャインのズーツに浮かび上がった淫核の膨らみをつまんだ。

「ひぐうう——————ツッ!!」シャインは顔をはね上げた。

（だ、だめ——が、我慢できない——!!）

「イクっていうのよ、シャイン！」

「い、いやっ！ いわないわ！ 絶対にいわなひ——あ、あ——も、もうっ……あひいい



いいいい——ツツツ!!

シャインは全身をわななかせ、なにもかもを解き放ってしまった。秘部からぶしゃぶしやと汁が飛び散った。快楽の頂点はいままで感じたことのない浮遊感と恍惚感をシャインにもたらした。頭が真っ白になってなにも考えられなくなる。しかもライノミーナの指は止まることなく秘唇の上を蠢き、スーツ越しに割れ目を刺激してくる。そのせいで絶頂から下りてくることができず、そのまま二度、三度と極めてしまう。

「あらあら、プリミルとして強いだけじゃなく、性欲まで強いのかしら。ずっと溜め込んでたのね。でも、それよくないの。こうして責められると、初心な身体なんてすぐに屈服しちゃうんだから。見て、ミーナのお手々がぐしょぐしょよ」

ライノミーナはようやく手を離すと、シャインの膣から漏れた愛液で濡れた手を見せつけてきた。

胸裏に凄まじい罪悪感が湧いて、シャインは快楽の余韻も相まって茫然とした。ずっと幼い頃、我慢しきれずにお漏らしをしてしまった記憶が蘇った。布地に広がっていく温かな感覚、それが冷えていく気持ち悪さ。それがいま、人々を守るコスチュームであるプリミルスーツに広がっていた。だが、あのときと違うのは、愛液が冷たくなっていくことから気持ちいいということだった。

次第に怒りがふつふつとこみ上げてくる。こうなってしまうのもこの呪いのせいだ。気がつけば瞳に涙が滲んでいる。シャインはライノミーナに反抗しようと口を開きかけた。しかし、突如こみ上げてくる快感に、反駁の言葉は嬌声に変わってしまった。

「ひあああああつっ!! な、なひが……ああああんっ!! て、手が……脚があああつっ!!」
四肢が灼熱の快楽に晒されていた。収まっていたはずのエクスタシーがまたしても膺を激しく叩き、下腹部に刻まれた淫紋が滾り出す。

「イッチャつたから、淫紋が広がっちゃつたのよ」ライノミーナはさも悲しそうな声を出した。見れば、ブーツとグローブから覗く、太ももと二の腕に淫紋が広がり始めていた。

「あ、ああああつ!! いやあつ!! わ、わたし、ううっ、こんなもの……!!」

悔しがり性感を鎮めようとしても無駄だ。精神がいかに強靱であろうと、刺激に慣れていない肉体が勝手に感じ始めてしまっている。シャインはまたしても果ててしまいそうになつていた。

「可哀そうなシャイン……。でも大丈夫よ、淫紋を引かせる方法はあるの」

ライノミーナは言った。シャインは嫌な予感がした。

ライノミーナの影が大きく広がって、そこからひとりの少年が姿を現した。シャインは全身が凍り付いた。

矢野智明が股間を膨らませていた。

「すみません。通してください!」

ムーンは人々を押しつけて、泣き叫ぶ少年の傍に跪いた。戦闘員が破壊した道路の瓦礫で脚を切ったようだ。傷口を姉らしき少女が押さえているが、すでに道路にはかなりの血液が流れ出している。

「そうかなあ？」

智明は股間にそそり立つ自らの肉棒を、コスプレインナーズーツに包まれた沙弥の股間に押し当てた。プリミルスーツとは違いただの布切れであるそれからダイレクトな感覚が流れ込み、沙弥は「ああんっ」と甲高い悲鳴をあげてしまう。

「もう我慢できないはずだよ。身体の方はすっかりできあがってる。このまま犯してもいいんだ。でも、ボクは瑞華さんの言葉で聞きたいんだよね。犯してくださいって。プリミルシャインになりきっていいよ」

「いやあつ！ そんなこと……ああつ、やめて、そこを擦っちゃ……はあんっ！」

ペニスの裏筋にクリトリスを擦過され、沙弥は激しく腰を揺らして悶絶した。たまらな。智明の腰使いは女を責め慣れたそれだ。発情させられた沙弥などたやすく弄ばれてしまう。またしても絶頂の快感が昇ってくる。

（あああつ！ ま、またイっちゃう!! いいわ、イクのいいっ!! イク！ イク!!）

だが、牝の高みに上り詰めようとしたとき、智明はペニスを離れた。あと一瞬で絶頂できるといふ絶妙なタイミングで刺激を止められ、沙弥はもどかしさと羞恥に絶叫する。

「あひいいいんっ！ あつ、あああんっっ!!」

「イキそうだったんでしょ？ 残念だったね」智明はにやりとした。「どうだプリミルシャイン、悔しいか？ イキたければ自分でおねだりすることだ」

「い、いやあああつ！ 変なこといわないで！ ゆ、許さないわ!!」

「やっぱり、瑞華さんが一番プリミルシャインが似合ってるよ。その口調、あのとときのシ

ヤインとそっくりだ。さあシャイン、いうんだ。わたしを犯してください、ご主人様と」
「い、いうわけではないわ！ お、おとおおとおつ！！ やめ……そこおつっ！！」

智明はしつこくクリトリスを舐めた。さらには乳首の先端を爪でつついて、もどかしい快感を追加してくる。沙弥は顔を反らせ、股間に力を込めて快を貪ろうとするのだが、絶頂する直前で刺激を止められ、「いやああっ！！」と泣き叫ぶ。

どれほど堕ちようと、智明にだけは犯されなくなかった。だが、その抵抗も、自分をさらに昂奮させるものに過ぎないのだと、沙弥は心のどこかで理解していた。プリミルシャインのコスプレをさせられ、次第に変身しているような気持ちになっていくのを自覚する。口調も凛々しく淫らかなものになり、精液をかけられても退くことのない淫紋に冒される身体が心地よくてたまらない。

「感じるか、プリミルシャイン？ 屈服するんだ。ボクの前にね」「たまらないだろう？ スーツをずらしてしまっぞ」「もっと抵抗してみせろ。悔しくないのかシャイン」智明は何度も、焦らし責めを繰り返した。

智明のねちっこい口調が耳朶を打つたび、沙弥は頭がくらくらとした。耳元で囁かれる言葉は沙弥の羞恥を煽り、彼女のプライドを屈辱で穢した。そうされればされるほど、沙弥はたまらない敗北感に悶え、自分が沙弥であるかシャインであるか、その境界線が溶け始めてしまう。

「や、やめなさい！ わたしは負けないわ!! ああんっ、ク、クリトリスだめえっ」
「君の口からクリトリスなんて言葉が聞けるなんてね。シャインどうする？ ボクに屈服

するか？　しないなら一生このままだ」

智明がカプセルを何錠もまとめてつかんで沙弥の口に押し込む。口の中で次々にカプセルが弾け、粉に偽装された淫欲の魔力が弾ける。淫紋が活性化し、沙弥は身も心も蕩けてしまう。

（も、もうだめだわ！　耐えられない——仕方ないの、こんなにおかしくなったら、もう一回絶頂して、心を鎮めるしか……）

「す、するわ！　屈服する！　沙弥は……シャ、シャインは智明様に屈服しますっ!!」

ついに漏れた屈辱の台詞だが、智明はにやにやと笑うばかりで変わらずシャインの秘裂に肉棒を這わせたままだ。

「もっというんだシャイン。どうされたいんだ？」

「は、う……ああああっ！」　沙弥は身を振った。だが、一度秘裂を擦過されただけで、躊躇いはいともたやすく溶かされてしまった。

「シャインのおまんこに、智明様のおちんちんをぶち込んでください！　も、もう、我慢できないのおっっ!!」

沙弥が叫んだ瞬間、智明は人間とは思えぬ力でシャインのインナーズーツを破り、先走りを滴らせた剛直で沙弥の秘部を貫いた。

「ひぎいいいいっ!!」　沙弥は破瓜の痛みすら感じなかった。あるのはいままでの快楽を凌駕する、破滅的な激悦だけだった。「イグウウッ!!　イクッ、イッグウウウウ!!」

獣のような絶叫とともに四肢をわななかせ、待ちに待った絶頂に痙攣する。弦をいっば

いに引き絞った弓のごとく背を反らせ、白目を剥かんばかりに悶絶する沙弥は、淫らな声を放つ口から魂までもが抜け出てしまうのではないかとという恍惚とした悦楽に襲われている。瑞華のプライドも、シャインの真似事をさせられている屈辱もなにもかもどうでもいい。いや、自分を形作っているありとあらゆるものを裏切っているいまの淫らな沙弥の存在が、なによりも気持ちよくてたまらない。

四肢の隅々まで絶頂の電流は及ぶ。脚が持ち上がり、サイハイブーツの食い込むむつちりとした太ももが智明の腰を挟み、ふくらはぎが彼の背に回ってがっちりとはールドする。淫紋が輝いて脚から手から快感が走り、いつまで経っても絶頂から降りてくることができない。全身が発熱し、身体中が腔になってしまったかのような心地よさだ。

「ああああ——！ アアア—— ツツツ！！」

とろとろに蕩けた牝の顔を見せる沙弥に、四方から精液が降りかかる。

「たまらねえぜ」「さいつこうの牝奴隷だな、こいつ！」「もつと喘げよ、おら！！」

「ぐひひひひいっ！ 精液いいのほおおっつ！ もつとかけてえっ！ 沙弥に、シャ、シャインにいつぱひかけてへえええええええっつ！！」

（淫紋を退かせるためよ！ 気持ちよくなるためじゃない！ だからもつとかけて!! わたしを解放して!!）

いれられただけでめくるめく快楽に絶頂する沙弥であったが、まだ陵辱は始まったばかりだった。

「瑞華さん……いや、沙弥はやっぱり処女だったのか。どうだい、嫌われている奴に処女

を奪われる気持ち……はっ!!」智明は腰を引き、乱暴に秘部に打ち付けた。

「あひいいいっ! く、悔しいっ!! 悔しいに決まってるわ! いますぐ抜いて欲しいくらいよ!! あああんっ、沙弥って呼ばないで!!」

「シャインと呼べばいいのかい? 抜いてっていつても、君のまんこがボクのを締め付けて離さないんだ。ほらほら、乳首も感じるんだろう?」

智明の指が乳首をつまんだ。唾液を溢れさせる唇を穢らわしい少年の口が塞ぎ、無理矢理中に舌をいれてかき混ぜてくる。

(悔しい……! いつもなら、こんなこと……ああ……わたし、もう……)

キスされ舌を吸われると、沙弥の瞳はとろんと蕩けて、求められるがままに舌を差し出し、さらには自ら智明の舌を求めてしまう。自分が堕ちていくことを自覚しながら、それを止めることができない。

じゅぶぶ、ぐじゅぶぶと腔粘膜と肉棒の間で愛液が鳴る音を聞きながら、沙弥は狂わんばかりに悩乱し、快楽を貪っていた。絶頂から降りてこられないせいで息もまともにできず、意識が朦朧としてくるがそれも構わない。この悦楽があればどうでもいい。

「ボク、もう出そうだ。シャインのまんこにたっぷり出すからね!」智明が笑う。

「あひいいいっ! だ、だしてえええっ!!」沙弥は絶叫し懇願した。もはや彼女の思考に、中出しされることの意味も、妊娠の危険もなにもなかった。とにかく、腔に精液を出されればとてつもない快感を得られる。それしかなかった。

「わたしもっといっっちゃう、ああんっ! シャイン、おちんちんに負けちゃうううう



っ!!」

智明のペニスが沙弥の奥深くまで侵入し、子宮の入り口でびくびくとはねる。沙弥は力一杯亀頭を締め付け、最後には腰を揺り動かしてトドメの刺激を加えた。

「でるっ！」智明が叫び、薬によって生み出された莫大な量の精が沙弥の初な膣に放たれた。初めて感じる熱、そして快感——沙弥は一瞬で絶頂状態からさらに激しい悦の奔流に飲み込まれ、真っ白に染まる思考と視界に狂ったように叫んでいた。

「こ、これが中だしひいいっ！　すごひいっ、中だしいいのっ、きもちよしゆぎるうううっつ!!　癖になっちゃう！　こんなのハマったらだめなのひっ、わたし、も、もう……あああんっ！　イグイグイグヒイイイ!!」

悩乱する沙弥にいつまでも止まらぬ射精を繰り返し、智明は哄笑する。結合部からどぶどぶと精液が漏れ床に溜まっていった。四方から精液が降り注ぎ、沙弥の全身を白濁に染め上げていく。

「まだ終わらねえぜ」巨漢が言った。「まだまだたくさんいますからね」瘦せ形が続ける。「ああんっ、あああああんっ!!」沙弥は淫紋が退き、プリミルの力が漲ってくるのを感じながら、射精を続ける男たちの肉棒を見つめた。

智明が膣からペニスを引き抜いた。ぶっしやああああつ！　と失禁したかのように白濁汁を噴き出す沙弥の膣に、新たな男の亀頭があてがわれる。

「やめてええ、お願い、わたし狂っちゃうううっ、おちんちん、も、もう……このままじや、おちんちん中毒になっちゃうううっ!!」

「どこに？」ムーンは尋ねた。「わたしも一緒に行くよ」

「だめ」シャインはだだっ子をあやすような優しい笑みを浮かべて首を振った。「わたしの呪いに関すること……大丈夫よ、そんな顔しないで。わたしは平気だから」

「うん」ムーンはいつものように頷いた。「わかった、頑張つて」

シャインは手を振ると、ひとりビルの屋上に跳び上がり、闇の中に消えていった。人々が歓声をあげている。ムーンは戦場を一通り見渡すと、シャインと同じように人々に微笑みかけ、反対側のビルの上へ跳んだ。

だが、今日はそのまま帰るつもりはなかった。

闇を見つめる。シャインの姿はもうない。気配すら消えている。呪いに触られた身体で、これほど完璧に気配を消せるのだろうか。

だが、シャインは気づいていなかった。さつきかすかにコスチュームに触れたとき、ムーンが自分のエナジーを打ち込んでいたことに。ほんのわずかな——ムーンにしかわからない印が、シャインの行き先を示していた。

ムーンは矢のように駆けた。印は、あの忌まわしい幽霊屋敷に向かっていた。

屋敷に入ると、すでに智明もクラスメイトの男子たちも準備万端だった。巨漢と痩せぎすの男は薬を頬張り、目の周りが黒く変色していた。

沙弥はいつものようにシャインの姿で男たちの輪の中に入った。すでに淫紋は全身に現れていた。闇でプリミルエナジーを消費したせいだ。そのはずだ。

（大丈夫……また精液を浴びれば治るわ）

沙弥はぼうつとした頭でそう考えた。秘部がきゅんきゅんと疼いてたまらなかつた。部屋の中はむんと汗くさい。牡の欲望の匂いに満ちている。

「ほんとに瑞華さんじゃないか」男子のひとりが言った。

「瑞華？ ちがうわ、わたしはプリミルシャインよ」沙弥はそう言い放つた。コスチュームの裾をはためかせ、煽情的な視線を彼らに送ると、新顔の男子たちの顔はたちまち真っ赤に染まり、鼻息を荒くした。

「お帰り、沙弥……いやシャイン」智明が言った。

「と、智明様……！」沙弥は恍惚とした。

智明はいつの間にか、おどおどとした卑屈な少年から、精悍な牡へと変貌していた。それが帝国の薬のせいであり、彼が人から逸脱し始めていることを感じていながら、沙弥はなにもしなかつた。以前の自分ならどうしていただろうと思つたが、そんなことがどうでもよくなるくらい、智明や男たちから与えられる快楽は甘美なものであつたし、沙弥はそれに逆らうことができなかつたからだ。

そして、智明はついに一線を踏み越えた。

「見てよ、これ」

智明は右手を顔の前にあげた。五本の指が見る間にひとつに解け合い、肌色が赤紫色に変わると、自由自在に動き回る触手へと変じた。

「いつの間にかこうなつてたんだ。最初はさすがのボクもびびつたさ。それにコントロー

ルも利かなかった。でも、もう大丈夫だ」

「あ、ああ……や、矢野くん……！」沙弥はさすがに息を飲んだ。胸の内に封印されていたプリミルの心が目覚めかけ、智明に手を伸ばす。

だが、それもすぐに「口の利き方に気をつけるんだね」という智明の言葉で、昏倒させられた。

智明の触手が沙弥の身体に巻き付いた。淫紋が悲鳴をあげ、沙弥は嬌声を漏らした。

「ひあああああつ！ あ、ああんっ！！ こ、こんなもので——！」淫らな沙弥はたちまちシャインを演じた。「離しなさい、帝国の魔兵！ シャインがこの程度で……」

智明の左手までもが触手に変わり、締め付けられもがく沙弥の股間をぬるりと舐める。触手はぐちよぐちよと粘液にまみれ、それは先走り汁のような濃い牡の匂いを発していた。同時に牝を狂わす媚毒でもある。

「ひうううっ！ ち、力が抜ける——くはあああああつ！！」沙弥は為す術なく智明の元に引き寄せられ、触手の腕で力強く抱きしめられた。蛇のように長い舌が首筋から耳の付け根をなぞり、牡のつんとした匂いの唾液が穢らわしい轍を残す。沙弥はガクガクと痙攣しながら、ぼんやりと天井を見つめ、「あが、はへあ……」と艶めかしい音を漏らし舌を覗かせ、惚けたように涎を溢れさせた。智明のそれとは違い、沙弥の唾液は美しく淫らであった。

「君たちも遠慮することはないんだよ」智明が言うと、男子のひとりが昂奮の面もちで近づき、だらしなく伸びていた沙弥の舌をついばんだ。

「はへ!! あは、はあああああ……ッ！」

「智明に掴まっていなければ、崩れ落ちてしまったに違いない。淫紋は当然のように舌にも広がっている。食事はおろか、水を飲んだだけで絶頂できるほど敏感な舌先、口内を舐られ、感じないはずがない。だが、それを知らない男たちは、ぶしゃぶしゃと秘部から愛液を漏らす沙弥を見て、極度の淫乱だと思わなかつたようだ。」

「す、すげえ……！」「あの瑞華さんが……」と、智明くん！ 俺にもその薬をくれ！」

「ボクのものじゃない。ライノミーナ様がくださったものだ。好きに飲むといいよ」

「や、やめなさい……！」沙弥は言った。プリミルシャインの演技でもあり、瑞華沙弥として当然の振る舞いでもあり、また真のプリミルシャインとしての思いでもあつた。

「て、帝国の薬なんて、飲んじや……あぁうううっ!!」

「黙っているんだ、プリミルシャイン」沙弥の口にカプセルが押し込まれる。

沙弥は涙を流しながら、カプセルを噛みしめた。漏れ出した魔の力に淫紋が力を帯び、また思考がどろどろと淫らに蕩けていくのを感じる。こうなるともうだめだつた。淫紋の前に正気の沙弥は完全に屈服し、ペニスと精液を求めぬ淫らな牝豚と化してしまう。

触手がスーツをずらした。露わになつた秘部に、智明のものが入り込んでくる。

じゅぶ、ぐじゅぶぶ……艶めかしい音とともに、溢れ出る愛液を押しつけながら入り込んでくる肉棒はもはや人のそれではなかつた。

「ひああああっ！ ああっ、イクッ、イクうううっ!!」

（つ、つぶつぶが！ おちんちんにつぶつぶがああああつ!!）

新たな刺激に沙弥は悩乱した。智明に起こつた変化は触手だけではない。ペニスに生え

たイボのような硬い突起が膈壁を擦過し、抉りながら奥へと突き進んでくるのだ。イボからは淫毒が漏れ出していた。

「ボクはね、バックから犯すのが好きなんだよ」 智明は乱暴に、沙弥を床にはいつくばらせた。触手をアヌスに添え、くちくちと窄んだり開いたりを繰り返す桃色の菊穴に突き入れる。

「くは——あひいいいいいいっつ!!」 沙弥は弓なりに反って泣き叫んだ。

「瑞華沙弥を屈服させるこれがっ! 最高に滾るんだ!!」 智明はアナルに触手を出し入れしながら、もう片方の触手腕で何度も尻を叩いた。

「んひいいっつ! お、お許してください! お願ひ、智明様あぁっ!!」 沙弥は悶絶し許しを請うた。膈内で暴れる亀頭はしつこく子宮の入り口を突き、イボがGスポットに擦れて気持ちよすぎる。狂わんばかりの快感に涙がこぼれ、それをクラスメイトの男子たちに見られているのがたまらない。

アナルをぐちぐちと弄られると、それだけ秘部が縮まってしまふ。智明の触手は自由自在に腸内を動き回り、淫紋広がる粘膜に粘液を振りかけるばかりか、どぶどぶと触手の先端から白濁汁を溢れさせ尻の中へばらまいてくる。

「で、でてますうっ! 智明様、シャインのアナルに精液が! あはああぁっ! だ、だめです! またイツちゃう!! ひぎいいいいっ、狂っちゃうのほおおっ!!」

「もっど狂わせてあげるよシャイン。まんこにも中出しだ!!」

沙弥がなにか言う間もなく、智明は精を放った。魔物と化したペニスから放たれる精は



べつとりと濃厚で、それが全身の中でもっとも敏感な膣に注がれるのだからたまらない。

沙弥の思考は一瞬で白濁の彼方に飛び去り、恍惚の果てで砕け散ってしまうのではないかと思った。極上の快感は全身を弛緩させ、緩んだ膀胱からじよぼじよぼと黄色い汁を溢れさせてしまう。

「も、漏らしたぞ!」「瑞華の失禁だ!!」

男子たちの昂奮に満ちた声が心地よい。羞恥の極みで、沙弥は見せつけるように腰をくねらせ、とろとろに蕩けた顔をよく見えるように仰け反らせる。

(もつと見て! 淫らなわたしを……本当のわたしを見てえつ! 蔑んで、罵倒して! もつと、もつと精液欲しいのおつ!!)

男子たちの股間はすでに大きく膨らみ、ズボンに染みができていた。葉を飲んだのだから当然だった。

「かけて!」沙弥は叫んだ。「精液いっぱいかけてえつつ!!」

男子たちは我に返ったように服を脱ぎ始めた。智明が秘部とアナルから挿入物を引き抜いて沙弥を自由にする。途端に、あの幸福な快感が消え去って、沙弥はもういてもたってもいられなくなり、まだ服の脱げていない男子のひとりに飛びかかった。

「うおつ! み、瑞華……!」

「い、いまのわたしはプリミルシャインよ!」沙弥は叫びながら、彼のズボンを素早く下ろし、引きちぎるようにシャツを脱がしてペニスを剥き出しにした。ビクビクと勃起しているそれは皮が半分剥けているだけだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



ニ次元
**ドリーム
マガジン**
3D DREAM MAGAZINE

コミック O M I C
UNREAL
ファンファイル

正義の
ヒロイン
**姦獄
ファイル**
www.seijakufile.com

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

最新情報は公式サイトへ! [キルタイムコミュニケーション](#)

検索

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

二次元ドリームノベルズ

美少女 3D 小説

リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！
日常に密着したエロス、



とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！



フリタム120%!?
ジャンルにこだわれない
ドキドキキアラベ!

あとみつく文庫

祝 祝 祝 祝 祝
師

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプの?

二次元ぶち文庫

ハルク

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないライトノベル！



「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターノノベルズ」
から書籍化！

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ



世界 珠姫
デキの 妹
妹姫

ドキドキラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫